

第 37 回福島県輸血懇話会抄録

日時：2024 年 10 月 5 日（土）午後 2 時から
会場：原町生涯学習センター「サンライフ南相馬」

<一般演題>

1. 当院における手術に関連した血液製剤の適正使用への取り組み

¹⁾ 公立相馬総合病院 看護部

²⁾ 公立相馬総合病院 外科

³⁾ 公立相馬総合病院 検査科

○伊関 理恵¹⁾，山谷 英之²⁾，渡邊 清彦³⁾
吉田 志歩³⁾，齋藤 美香¹⁾，佐々木達也¹⁾

【はじめに】

当院での輸血施行例は年間約 600 件あり，手術に関連するオーダーが最も多い。年間約 1,000 件の手術をおこなっており，2004 年に濃厚赤血球廃棄率が 51.5% になった。廃棄の理由として，開腹による消化管の手術や，血管系の手術が関連していた。そこで血液製剤を適正に運用するために，手術関連の血液製剤廃棄 0 を目指し，他職種でこれまで取り組んできた結果を報告する。

【取り組み】

- 輸血療法委員会（2006 年 6 月より設置）発足
 - 輸血療法の適応，血液製剤の保管管理・使用状況・適正使用の徹底及び輸血療法に伴う事故や副作用，合併症対策について検討し，適正な輸血療法を推進することを目的としており，定期的な研修会を実施している。
- 血液製剤管理を薬事科から検査科へ変更
- 電子カルテ導入に伴い術前検査オーダーのセット展開
- 術前検査チェックリストの作成

【結果】

2004 年～2023 年までの廃棄率変化（一部を提示）

使用年	RCC 使用本数	廃棄本数	廃棄率 (%)
2004 年	646	333	51.5
2006 年	613	164	26.7
2010 年	818	53	6.7
2017 年	504	10	2.0
2023 年	662	5	0.8

【考察】

手術関連の血液製剤廃棄 0 を目指し，血液製剤の管理を薬事科から検査科へ変更することで，医師からのオーダーをダイレクトに受けることができ，交差適合試験，不規則抗体検査がスムーズとなり，効率的に運用できるようになった。術前に検査データを医師，看護師，検査技師が共有することで，血液製剤のオーダーが適正な量かチェックすることができるようになった。また，開腹手術から出血量の少ない腹腔鏡下の術式が主流になったことも廃棄率低下の要因の一つである。また，血液製剤の取り扱いと安全に輸血療法が実施できるように，研修会を定期的の実施し職員を教育してきたことも要因の一つにあげられる。

【今後の取り組み】

引き続き，多職種連携を図りながら安全で適正な輸血療法を推進していきたい。

2. 小規模病院 輸血関連業務の現状と課題

～若手技師 技師歴 3 年の挑戦～

医療法人伸裕会 渡辺病院 臨床検査課

○須藤 佳菜，阿部 洋子，高田有里子

当院は，病床数 140 床の小規模病院である。臨床検査課は検査技師 10 人体制で検体業務（主担当 3 名）・生理機能検査（7 名）に従事している。輸血業務で取り扱う血液製剤は，整形外科領域の術中，術後出血リスクを考慮した血液製剤が最も多い。次いで貧血改善を目的とした内科的治療用の血液製剤が多く，それらは必要の都度，発注・入庫・割り当てを行い，交差適合試験，不規則抗体スクリーニング検査等の一連の業務を担当検査技師 1 名が血液検査，凝固検査と兼務で行っている。

新人検査技師は，これらの検査を夜間待機，休日日直中に一人で行えるよう，入職後研修期間を経て，一定の練度に達することで夜間待機，休日日直に従事することが出来る。

研修期間が終わると，新人検査技師は配属された分野の自己研鑽を始める。その為担当領域ではない輸血関連業務等の手技は，担当分野検査の合間に不十分な内容の錬成をしなければならない。

入職 1 年目（2023 年 1 月 1 日～2023 年 12 月 31 日）の輸血関連検査業務（交差適合試験）の自身が検査に携わった回数は，1 ヶ月平均約 1～2 件（年間 17 回）であった。その他には輸血関連の勉強会への参加・研究班の班長挑戦など，様々な経験を積み